
『真実の声を聞き届け！』

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『真実の声を聞き届け！』

【Nコード】

N2191S

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

少年陰陽師の現代パラレルで昌浩転生ものです。元は以前やっていたHPで作ったやつです。途中から作り変えていますか・・・（・・・）

あらすじ…。

平成の世昌浩の生まれ変わりが転生してくると聞いた神将が一同に決した。そこで見た赤子はなんと双子だった！

だが、二人の内一人は『昌浩』の生まれ変わり。
紅蓮に引き合わせてみると二人とも泣かないが双子の内一人から『昌浩』の霊力を感じる。そちらを『昌浩』だと決定したが、実はもう片方の赤子が『昌浩』だった……。そして二人は成長し…。

待ち望んだ命

――ずっと待っていた・・・

――約束は果たされる・・・

平成の世 ある一家に嬰兒が誕生した。

ーおぎゃあおぎゃあー

家中に元気な嬰兒の泣き声が木霊した。

家のある一室に集った者達がいた。

そこに集った十二人の存在がいた。

彼らは均等性がなかった。現代で言う小学生ぐらいの子供の姿もいれば青年、壮年、そして老人というバラバラだった・・・そう姿だけを見ればの話だが。

彼らは共通しているのは彼らは人間ではない、神の末端と呼べるもの達という事だ。

末端とはいえ神に分類される彼らが一同顔を揃えて下界に降りてくる事は滅多に無い。

あったとしてもそれは彼ら個人の考えで単身で姿を現すかもしくは彼らを

式神として下している主の呼びかけにのみ一同は姿を現す。

そして今回もそれと同じように彼らの主である人間の呼びかけに姿を現したのだ。

そしてその主は彼らを呼び出し、彼らをこの部屋で待機するように言葉を残し部屋を去った。

彼らに衝撃な一言を残して……。

「『昌浩が生まれてくる……』と……。

待ち望んだ命（後書き）

始めまして。この小説をよんでくれてあるがとうございます。

あらすじでも書きましたが、こては以前やっていたサイトの小説を元につくったモノです。途中で変わっていることもあると思いますが、長く付き合っていたけると嬉しいです！！

アメブロでも同時進行でやっていくつもりですので、アメブロをやっている方がいらっしゃるならそちらも見てくださいと嬉しいです（^^）どちらかを先に更新するかわからないので（笑）

よろしく願います！！

安倍晴人

彼等の心は弾んでいた。

当然だ。昌浩が無くなってから何十年、何百年の間ずっと待ち続けてそして願っていたのだ。

喜ぶなというほうが無理な話だ。

そして、もうすぐその存在を感じることができるのだ。

しばらくしてガチャという音とともに彼等の待ち人がやっと姿を現した。

平安の世で『安倍晴明』であり、そしてまた今世の彼等の主である安倍晴人だ。

「っ！晴人っ！！」

晴人が部屋に入ってきたらとたん一人の青年が声を張り上げた。

彼は驚恐を司る十二神将。最強にして最凶の闘将、煉獄の将・騰蛇とつだといい、身長186cmと十二神将の中で一番の長身で精悍な顔つ

きに、黒とも見紛う深い紅の髪と切れ長の黄金の双眸をもつ。褐色の肌で、一切の無駄のない逞しい体軀をしていた。

「紅蓮……」

紅蓮。という名はその身に纏う焔はあらゆるものを灰すら残さず無に帰す甚大苛烈な焔ゆえに地獄の業火と忌み嫌われていたのを『発する炎が水面に咲き誇る紅の蓮のようだ』と晴明が彼に与えた名だ。

部屋に入ってきた晴人は心配そうな紅蓮を見、そして周りを見ると他のもの達も似たりよつたりの顔をしている。

「晴人……昌浩はっ!?!?」

それに晴人はうれしそうに答えた。

「ああ……無事に生まれたよ」

ホッと彼等は安堵の息をついた。

そんな彼等に晴人はフツと微笑む。

(昌浩・・・お前は彼等とうまくやっていたようだな・・・)

「晴人、それで昌浩は？」

勾陳が聞いた。

十二神将の一人で土将であり紅蓮(騰蛇)と同じく凶将で、四闘将の一人で最強である騰蛇に次ぐ通力の持ち主。身長165cm、肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に濡れたような黒曜の瞳を持つ女性である。

「ああ・・・こっちだ」

晴人は勾陳に答え促すかのように部屋を出た。

そんな晴人に彼等は黙って付いていくのだった。

安倍晴人（後書き）

ありがとうございました！！

双子

「・・・ここだ」

晴人に案内されて着いた部屋に入った彼等は驚いた。

確かにそこには赤ん坊がいた。だが・・・

「え、二人・・・？」

思わず呟やいた太陰の言葉はその場にいた晴人以外全員の思いだろ
う。

「ああ・・・」

晴人は嬉しそうに笑った。

「双子・・・か」

勾陳が納得したように頷いた。

平安の世では忌み嫌われていた双子。だが今は平成の世。昔とちがい忌み嫌われる事もない存在。

「え・・・じゃあ昌浩は？」

「太陰、よく見てみる」

「え？・・・あー!!」

そう玄武に言われて太陰が赤ん坊を見るとあることに気付きはつと
した。

「これって・・・僅かだけど昌浩の靈気？でも二人とも靈力はある
わ」

その気を纏っていたのは安らかに眠っている二人のうち右側で眠っている子。

確かに二人とも霊力は纏っている。だが太陰の言葉通り右側の子には昌浩の気を感じた。

「……紅蓮」

晴人に呼ばれ赤子W凝視していた紅蓮は顔を上げて晴人を見る。

晴人は促すように頷く。

紅蓮はそれにゆっくりと頷き赤ん坊に近づこうと足を踏み出した。

ゆっくりと赤ん坊の方に進む紅蓮を晴人と神将は固唾を飲んで見守った。

紅蓮が二人の赤ん坊に近づくと左に寝かされている赤ん坊がピクリと指を動かした。

それは昌浩の靈氣を僅かに感じた方とはちがう赤ん坊だった。

「え・・・」

もしかしたら、泣くのではなく・・・と紅蓮はぎくりとした。

双子（後書き）

ありがとうございました！！

泣かない赤子

紅蓮は赤ん坊のすぐ傍で足を止めた。

赤ん坊は敏感だ。普通の赤ん坊なら紅蓮が持つ苛烈な神気に怯え泣き出す。

そして最後には熱が出てぐったりとなってしまう。

だがそれは、昌浩以外の話だ……。

「……え。泣かない？」

泣かないのだ……。それも二人とも。

「そんなまさか……」

今までになかったことだ……平安の世でも平成の世でもこの長い年月の中で紅蓮の神気に怯え泣き出さなかった赤ん坊など清明（晴人）かもしくは生前の昌浩にしかありえなかった事だ。

紅蓮は呆然と目の前の赤ん坊を見つめた。

自分の神気に怯えない人間が二人以外いるのが信じられないと顔を
して。

晴人は紅蓮のその様子を見ながらも内心驚愕していた。

晴人にとっては紅蓮の神気に怯えない子が現れる事は嬉しいことだ。

それは紅蓮の大切な存在となりうる事だから。

「晴人・・・」

玄武はそんな晴人を見る。

「ほお、これはうれしい展開だな・・・。まさか昌秋が泣かないと
は・・・。」

「昌秋？・・・子の名か？」

勾陳が晴人に聞く。

「ああ、そうだよ。昌浩の今生の名は『浩秋』そしてもう一人の子が『昌秋』だ」

晴人はやさしく二人の赤ん坊の頭を撫でながら言った。

紅蓮は内心驚愕をしているがそれを落ち着かせてそつと浩秋を抱き上げる。

その存在を確認するかのように…………。

「浩秋・・・」

晴人はそんな彼に微笑み昌秋を抱き上げ紅蓮に見せた。

「紅蓮・・・」

紅蓮は晴人に抱き上げられている赤ん坊・・・否『昌秋』の柔らかい頬にそつと指を伸ばした。

その鋭い爪があたらない様に細心の注意をしながら。

「あつ、あつ、あつ・・・」

その指を赤ん坊は無邪気な笑みを向ける昌秋のその小さな手が掴んだ。

「っ！・・・まさ・・・あ・・・き」

「あつーきゃっきゃっ」

昌秋は紅蓮に向けて無邪気に笑ったのだった。

やっと会えたね。

この時をずっと待ち望んでいたよ。

昌浩、ずっとお前を待っていた。

長い長い時の中で、この時だけを待ち望んでいた……。

泣かない赤子（後書き）

ありがとうございました！！

傍にいるなら何も望まない・・・

「いつてきまます」

「いつてきまゝす」

声をかけて玄関から出た二人…昌秋と浩秋だ。

ちなみに前者が昌秋で後者が浩秋だ。

あれから・・・13年。何事もなく平和に過ぎた。

安倍家に初めて生まれた双子達13歳になり中学生になり何事もなく過ぎた・・・そう何事もなく・・・。

二人。否、足元にぼてぼてと歩いている一匹は学校に向かって歩いていた。

そう、足元にいるのは平安の世『安倍昌浩』の相棒であり、ずっと共に行動していた昌浩命名『物の怪のもっくん』である。

「あっ！」

学校に向かって歩いてしていると浩秋は思い出したように声を出した。

「どづしたんだ？」

昌秋と物の怪が急に声を上げた浩秋を振り向き、物の怪は不思議そうに聞いた。

「俺、今日日直だった……」

あははと苦笑いをしながら言う浩秋に物の怪はため息をついた。

「しっかりしてくれよ。晴明の……いや、晴人の孫……！」

ため息をつきながら呆れたように言う物の怪にムツとする浩秋

「なんだよ、それ。そんなの今関係ないだろ」

「いーや、そんな事ないぞ？あいつならな・・・」

「ごめん。昌秋、俺先に行くな」

「あ、うん。わかった」

物の怪が何か言っているのを無視して浩秋はさっさと一言残し、走り去っていく。

昌秋は目をつぶりながら、晴人ならこのときどうするかなど熱弁をしている物の怪を見た。

「……忘れ去られて、といつか置いてきぼりをくらっている物の怪を……。」

「……もっくん」

「ん？」

思わず声をかけた昌秋に物の怪は自分が置いてきぼりにあれた事すら気付かず足元から昌秋を見上げた。

昌秋は物の怪のその姿に懐かしそうに瞳を細めたが、フツと目をそらして浩秋が走っていったほうを指差した。

「……浩秋、もういったけど……いいのか？」

それにギョッと物の怪は近くに浩秋がないことに気付くと昌秋が指したほうを見る。

そこには走っていく浩秋の姿……。

「くらー！……浩秋！おいていくな！……じゃあな昌秋気をつけていよー！」

そう叫ぶと走っている浩秋を追いかけようと走り出す物の怪。

「うん」

バイバイと手を振る昌秋に背を向けて走っていった。

おいていかれまいと浩秋に元に追いつく物の怪。

「こら！浩秋、人の話はちゃんときけて昔からいつてるだろっが！」

浩秋は走りながら、言う物の怪に答える。

「なにいつてんのもつくん。もつくんは人じゃないし、第一今は俺すっごく急いでるの！そんな話なんて聞いてられらいつて！」

その浩秋の答えに物の怪は涙を拭うふりをする。

それを走りながらしているのだからなんとも器用である。

「うつつ。俺は悲しいよ浩秋……。俺はそんな子にお前を育てた覚えはないぞっ！ー！」

「俺だつてもつくんに育てられた覚えはないって、本当にこんな事している場合じゃないって、遅刻するー！ー！」

走りながらもそんな会話が昌秋のところまで聞こえてくる。

昌秋はそんな彼等の会話をどこかぼんやりしたまま聞きながら歩いていた。

そして、寂しそうに悲しそうに笑った。

そう・・・あの時のまま『昌浩』の生まれ変わりは浩秋とされた。

本当の『昌浩』の生まれ変わりは昌秋にもかかわらずだ。

それは仕方が無いといえば仕方が無いことだった。生まれてくる時『昌浩』の気を多く纏っていたのは浩秋だったのだから。

だけど・・・それでも・・・。

「っ！もっくん……………紅蓮っ！！」

昌秋はそう呟きぐっとな耐えるように目をギュッとつぶった。その声はもう届くことはないのかも知れないけど、

どうか伝わってほしいと心の叫びを上げていた。そしてその声はすごく苦しい声だった……………。

ただ、傍に入れるなら、何も望まない……………。

傍にいるなら何も望まない・・・(後書き)

本編に入りました!!ありがとうございます!!

声

――
……紅蓮っ……!!

物の怪のもつくん事十二神将騰蛇、基紅蓮はふと聞こえてきた声に足を止めた。

「あれ? ……もつくん?」

走っていた浩秋は突然隣にいた物の怪の姿が見えなくなり振り返る。ち物の怪が立ち止まっているのを見つけた。

浩秋はそこには物の怪が後ろを振り返ったまま固まっている物の怪に怪訝に思い、物の怪が見ている方を見るが、そこには何もなく普段の光景が広がっているだけだった。

「???」

(どうしたんだろうもつくん?)

一方、物の怪は先ほど聞こえてきた声に後ろを振り返ったまま呆然と固まっていた。

「そんな・まさか。いやいやそんな筈は・」

い・まの声は・・・気配は・・・まさ・か、否、そんなはずはない。昌浩の生まれ変わりはここにいる浩秋だ。

そんな筈はない・。

「・・・?おゝい。もっくん?」

「おわっ!?!?」

ひよいと考え込んでいた物の怪は突然浩秋に抱きかかえられて驚きの声を上げて目の前の見慣れた顔に視線をやった。

「・・・？浩秋？？」

「浩秋？じゃないよもっくん！俺は急いでのー！いつまでもそっし
ているなら俺先に行くからね？」

「あ、ああ、悪い」

物の怪は浩秋に抱えられながら、バツの悪そうな顔で答えた。

「ったくもっつ」

浩秋はそんな物の怪を下ろすとさっさと走っていった。

物の怪は浩秋の後姿を見て、そして今一度後ろを振り返った。

「…………まさか、な。」

物の怪は自分の中の疑問に気のせいだと首をふり浩秋を追いかけて走っていったのだった。

声（後書き）

ありがとうございました！

彰菜と彼等の日常

放課後。

授業終了のチャイムが鳴り響いた。

HRが終了して昌秋が帰る準備をしていると教室の扉が開いた。

「昌秋、浩秋、帰りましょう?」

教室に入ってきたのは黒髪の長い少女。彼女の名は藤原^{あきな}彰菜、年は昌秋達と同じ年で祖父の晴人の知り合いの娘で昔からよく遊んだ、いわばで二人の幼馴染だ。

そして、平安の世の『藤原彰子』の生まれ変わりだ。彼女にもちろん記憶はない。だが、前世と同じように視鬼の才は健在のようで物の怪の姿もばっちりと見えている。

このことを知っているのは晴人と昌秋と十二神将のみだ。

「うん。ありがとう。わざわざ迎えに来てくれて」

昌秋が嬉しそうに笑った。

「おう、彰菜、いつも悪いな」

物の怪が言う。

「うん。気にしないで。私が二人と一緒に帰りたくてしてるのだから」

ふわっと笑って首を振る彰菜にありがとう。と昌秋はもう一度いう。
余談だがこの彰菜の優しい微笑みがいい！とクラスの男子に人気である。

「悪い、おまたせ！」

浩秋は鞆に急いで荷物を詰め込み立ち上がった。

彰菜はそれになっこりと笑った。

「じゃあ行きましょう」

彰菜はいつも放課後になると教室に入ってきて、三人、否、三人と一匹と共に帰るのだ。

これが彼等の日常の風景である。

彰菜と彼等の日常（後書き）

ありがとうございました。

夜警

その日の夜家族が皆、寝静まった頃、昌秋はベットからゆっくり起き上がった。

時計を見ると夜中の1時を示していた。

「やて、と・・・」

電気を緩くつけて、クローゼットの奥からフード付きの外套がいのうをとり出し服の上かた着る。

さらに、クローゼットの奥に置いている箱の中から予備の靴を取り出した。

そして電気を再び消してフードを被って窓際によって靴を履くと窓をあける。

昌秋の部屋は二階にあるが、窓をあけると少し離れたところには大きな木があつてそこから外に出れるのだ。

元々、『安倍家』は裏の世界で有名な平安の世から続く陰陽師の家計。今はほとんど忘れ去られていて普通の生活を送っているが、先

祖代々のこの家は結構でかい。平安時代、『昌浩』たちが住んでいた屋敷を建て替えたのが現在住んでいる家だ。

引越しを考えた事もあつたらしいが、ここには『安倍』家がずっと守って気きた家であつたし、邸の真下が龍脈の合流点であつた事でそう簡単に出ることはできないと結論つけて立て替えてこれまで通り住むことにしたのだ。

そのため『昌浩』であつた昌秋にとって、ここは昔からの馴染みの場所でもあつたし幼き頃からいるのだどうやったら外に出れるのかなどは容易にわかつた。

昌秋は外の気配を探り神将や人の気配が近くにないのを確認に窓から木に飛び移つた。

昌秋がこうやって夜中に家を抜け出すのは今回が初めてではない。

毎日とはいかないが、3日に一回はこうやって夜警をしている。平安の時の用に今はもう

妖があちこちに跋扈しているような事はないが、たまに妖はいるし、なにより昔からずつととしている夜警は

生まれ変わったとはい記憶のある昌秋だ。そう簡単にその癖みいたなものは抜けないものだ。

それに念のためだ。

スタツつと木から外に出てズレ落ちかけたフードを再度深く被り直し気配を消してその場をゆっくり歩いていく昌秋の姿は誰にも見られることはなかった。

そこには静かな夜の気配が流れていた。

夜警（後書き）

ありがとうございました！！

助けを求める声

昌秋が夜警をしながら歩いているとやはり夜中なだけあって殆ど人は見当たらない。

いたとしても一人か二人でその人たちも疲れた顔をして歩いているサラリーマンぐらいだ。

その人たちも昌秋が気配を消して歩いているため昌秋に気付くことなく歩いていく。

もし気付いていたら、昌秋の姿を見て不審者としてつかまりそうだ。

何故なら昌秋の今の格好は黒い外套を被っているのだから。

平安の世は夜になったら真っ暗闇となるが今は昔とちがい夜でも外には電気がついているためそんな姿の人物を見たら怪しさ満天だろう。

気配を消しているしできるだけ電気のアたらない場所をあるいているため気付かれることもないが……。

―異常はない……か。

……ま、あっても困るけど……。

昌秋がゆっくりと歩いているとその内本当に誰もいなくなっていた。
いつの間にか隣町まで来ていたようだ。

「……………ふう」

「とりあえずこの辺りを一周してから帰るか……。」

そう歩きながら考えている昌秋。

「……………つ……………て」

昌秋は歩いているとふと、どこからか声が聞こえた気がした。

「ん……………ん？」

足を止めて周りを見回すが特に変わった事もない・・・。

「・・・お、・・・だ・・・ま」

気のせいかと思った昌秋だったが耳を澄ますとやはりどこからか声が聞こえてきた。

その声と同時に妖気を感じた昌秋は急いで声が聞こえた方に足を進めた。

「！！こっちか!？」

昌秋が声と妖気がする方に走っていくと一つの公園が見えてきた。

そこに急いで入っていくと先ほどよりも声をはっきり聞こえた。

「俺達を食っても・・・うまくないって！！俺達弱い雑鬼なんだから・・・」

昌秋はこの声をどこかで聞いた事があるような気がした。

「くそお・・・こんな時孫がいてくれたらな〜」

「「「「孫〜!」「「「「」

聞き覚えのある声に聞き覚えのありすぎる言葉・・・。

この声は・・・まさか!

昌秋がその声の元に駆けつけるとそこには昌秋の予想通り見覚えのある顔ぶれがあった。

「おまつ!?!?」

その知った姿に思わず声を上げそうになるが、そこからそう離れていない場所にいた妖に

まずはこいつをなんとかしなければ、と踏みとどまった。

その妖は猿の妖だった。だがその口から出ている犬歯はような歯は鋭く、その爪も尖っていて鋭い。

飢えているのかその目は赤く血走っていた。今にも雑鬼達を食べてしまいそうな勢いだ。

昌秋は急いで雑鬼の傍に走り寄った。

助けを求める声（後書き）

ありがとうございました。

誤字指摘・感想ありがとうございました。

励みになりますっ！！

誤字修正しました。

雑鬼ズ

昌秋は怯えて固まっている雑鬼達の目の前に立ちはだかると目の前の妖に対峙した。

「「「「なっ!?!」「」「」

突如目の前にやってきた人間に雑鬼達は驚きの声を上げた。

「お、おい!?!」

「ーグワアアアアアア

雑鬼達の声に答えている余裕もなく、目の前の妖が大きな声を上げながら襲い掛かってきた。

昌秋は咄嗟に障壁を築く。

「禁!!」

妖は予想外の術に跳ね返されてドンツと公園の砂場の地面に叩きつけられた。

勢いよく叩きつけられたためその勢いで砂場の砂が周囲に宙に浮いて散らばった。

「今のは……」

「……陰陽術だよな?」

「ああ……昔、清明や孫が使っていたやつだ……」

「って事は陰陽師!?!」

雑鬼は呆然と目の前に怒っている事を見ていた。

グルグルグル……！！と地面に倒された妖は起き上がると昌秋に向けて威嚇をする。

完全に妖の狙いは雑鬼から昌秋に変わった。

その様子を見て昌秋は身体をゆっくりと移動させて雑鬼達から離れた場所に移動する。

グアアアアアと再び雄たけびを上げながら襲い掛かってくる。

「くっ！……禁！！！」

昌秋は先ほどと同じように術を行使するが、妖も同じ手はくわないと言わんばかりに妖の体に当たる前に後ろに飛び上がった。よけた。

その瞬間昌秋は妖の四肢を拘束する

「縛縛縛、不動縛！！」

昌秋は相手の身が固まって動かなくなったのを見逃さず続けて攻撃術を放つ

「オンアビラウンキャンシヤラクタン　！！」

昌秋が放った真言によってが無数の刃となって妖に叩きつけられた。

《グッグアアアアアア》

その攻撃が決め手となり妖は叫びを上げながら消滅した。

昌秋は念のため辺りに妖気がないか確認してからないことを確認するとホッ肩の力を抜いた。

ふとそれに昌秋は気付き僅かに苦笑した。

昔ならいざ知らず今世になってから隠れて鍛錬はしていたが妖を倒すのはこれが始めてだ。

そのため知らず知らず肩に力が入っていたのだ。

昌秋は少し離れた所にいて固まっていた雑鬼を見ると雑鬼はこちらを見たまま呆然と固まっていたが

昌秋が自分達を見ている事に気付いてハッとなって後ずさった。

《お・・俺達も消すのか？》

「はあ？」

ビクビクしながら聞いてくる雑鬼に昌秋はきよんとした。

元々陰陽師は妖と敵対者として認識される。たとえさつきは助けてくれたとはいえ自分達も弱い雑鬼とはいえ人間にしたら妖には変わりはない。

もしかしたら、さっきのやつらと同じように消されるんじゃないか。昔は昌浩や晴明のような人間がいて、自分達を一人人としてみてくれてたとえ踏みつぶしても怒りはするが消されるなんてことはなかった。

それに加えて、今は見鬼の才を持つ人間は格段に減った。

雑鬼達もずっと生きてきたが会ったのも10人も満たない。その人間も自分達を恐怖の対象でしか見ることはなくすぐに悲鳴を上げて逃げ出していただけだった。

ならば陰陽師であり自分達を視る目の前の人間は自分達を消すのだろうか。

たとえさつきは助けてもらったが、自分達は弱いから後回しでも大丈夫だと思われてもおかしくない。

実際そうなのだから……。

一方、昌秋は目の前の雑鬼の言葉が不思議にならない。

雑鬼達はまだ気付いていないのか、『昌浩』時代によく知る雑鬼で猿鬼、一つ鬼、竜鬼だったのだから。

今まで何度押しつぶされて怒りを感じても本気で消そうとも思わなかった存在に今更消すのか？と聞かれても

はあ？としか返しようがなかった。

だけど、昌秋はふと思い出した。

今は『昌浩』がいた時代でもないし、彼等は自分が『昌浩』だとは知らない。

陰陽術を使ったのだから陰陽師としては認識しているはずだし、妖である彼等は自分が消されるのではと

心配になるのは当然の心理だ。

・・・だが、先ほどの霊力で自分が『昌浩』だと気付かないものだろうか？

念のために霊力がもれないように公園に結界を張っていたとはいえそれは外に出ないようにしているだけであって中には影響がないはずなんだけどな。

もしかして、あまりにもハプニングに気付かなかったとか？

昌秋は苦笑をこぼした。

そして雑鬼達の方に足を進めると彼等はやはり恐怖で固まってしまった。

雑鬼ズ（後書き）

ありがとうございました。

嬉し涙

ビクビクしている雑鬼にそんなに俺怖そうにみえるのかなあ？と若干落ち込みながら昌秋は雑鬼達の足元まで来るとその場でしゃがみこむ。

《な、なんだよ？》

強気な態度をとろうとしているがやはりその体は震えているため迫力が欠けている。

昌秋は苦笑を零した。

「そんなに怖がらなくてもなにもしないよ・・・」

《ほ、本当か？》

猿鬼が恐々と顔を上げて昌秋を見上げて聞いてくるのに昌秋は頷いた。

それに気が抜けたのかホオツとため息をついて肩の力をぬく猿鬼、
一の鬼、竜鬼。

昌秋がなにもしないといったとたん安堵の顔をする彼等は実に素直だ。

雑鬼は時に人間より感情豊かで正直である。

《あ！・・・あのさ！ありがとな！助けてくれて！》

《おう！サンキューな！》

《お前が来なかったらどうなってたか！ありがとさん！》

安心して思い出したのか竜鬼が昌秋に嬉しそうに笑って言う。

それに思い出したかのように後に2匹も続けて言うてくる。

《ん？そういえば、この感じ・・・なんか懐かしい・・・？》

《え？・・・あ、本当だなんか懐かしい感じがする？》

《ずっと、昔・・・よく会ってたような・・・》

そう突然言ってきた雑鬼ズに昌秋は驚愕した。

まさか、気付いた・・・？あの時は仕方がなかったとはいえ彼等にさえ今まで気付かれなかった『昌浩』（オレ）の存在に・・・？

「・・・おまえら・・・」

昌秋が呆然と彼等を見ているのに気付かずに猿鬼達はうんうん
っと思いつい出そうとがんばっている。

《・・・あ、ああ！！思い出した思い出した！！》

《お、思い出したのか！？何だ何だ！？》

《ほら、孫だよ！！孫！！昌浩だ！》

昌秋は信じられないと思うと同時に胸がつまる思いがした・・・。

気付いた・・・気付いてくれた。この世ではもう誰も気付かれることもなくそう思っていたのに・・・

気付いてくれるやつが・・・いた。

涙が出そうになった・・・。

「っ！！！」

《な？そつだろ！？な！お前昌浩だろつ！？》

《本当に孫か！？》

《そうなのか？なあ孫！？》

顔を突き出して聞いてくる猿鬼達に昌秋は言葉に詰まった。

「……………」

《《孫！！》》

「……………んで……………こんな時まで……………孫……………言っな……………」

昌秋は胸に詰まって言葉が詰まっていた。

それは自分を気付いてくれた嬉しさだったり、覚えていてくれた感謝の心だったり、懐かしさだったり様々な感情が溢れ出そうだった。

ただ、言葉が胸に詰まって……………泣きそうだった……………。

昌秋はしゃがみこんだまま、あふれ出しそうな涙を歯を食いしばって押さえ込もうとするが、

それは適わず目をぎゅっとなつぶった。

《やっぱり孫だ！！……どうした？泣いているのか？》

三匹はきよとんとして顔を見合わせた。

《おい、孫？どうかしたのか？》

「……うっ……うっ……」

その場にしばらく昌秋の押し殺したかのような声が響いた。

嬉し涙（後書き）

ありがとうございました。

長生きする命

ようやく昌秋が落ち着き顔を上げると困ったように昌秋を見るめる三匹がいた。

《だ、大丈夫か？》

昌秋は小さく頷いた。

「うん。…ありがとう」

ありがとう。俺に気付いてくれて。

その感謝の言葉は心配してくれてあるがとつと同時に覚えていてくれて、見つけてくれた感謝の思いから出た言葉だった。

《おつよ！！》

三匹は嬉しそうに笑う。それからあ！と思い出したような顔をした。

《なあなあなあ！お前昌浩だろ！？》

《そつだそつだ！なあそつだよな！？》

《久しぶりだなあ》

三匹は昌秋の顔を下から覗き込みながら言う。

昌秋はそれにどう答えようか一瞬迷う。だけど気付いてくれたこいつらを騙したくはないし泣いてしまった手前ちがうとはいえないと

思った。

「…うん。久しぶり、猿鬼、一つ鬼、竜鬼」

そう昌秋が言うのと三匹は本当に嬉しそうに笑った。

彼等にとつて『昌浩』やあの時代はなによりも楽しかった時であり大切な思い出でもあった。

そして、彼等がいなくなった時から自分達の『名』を呼んでくれる人間はいなかったため

またこうして知っている人間に『昌浩』に会えてまた自分達を見てくれて宝である『名』を

呼んでくれる昌秋がいてくれることは嬉しかったのだ。

《やっぱりそうだよな！本当に久しぶりだな》

《元気してたか？》

《なに言ってるんだよ。昌浩は死んだんだぞ？》

上から猿鬼、一つ鬼、竜鬼である。

三匹は顔を見合わ怪訝に首をかしげた、それに昌秋は苦笑をこぼした。

「生まれ変わったんだよ。今の俺の名は『昌浩』じゃない」

今の俺の名は『安倍昌秋』だ。

そう答えた昌秋に三匹はキョトンとしてついで得心がいったように笑う。

《そっか》

《生まれ変わってたんだな》

《じゃあまたよろしくな！昌秋！》

彼等は妖であるし、昔から陰陽師が身近にいたせいか元から知っているのか『生まれ変わり』という事には得に疑問に思うこともなく受け入れたようだ。

昌秋はフツと笑った。

昔、ずっと『昌浩』が潰されていた時は『孫』としか呼ばなかったのに阿神の事件があつて以来彼等は孫ではなくちゃんとした名前を呼ぶようになった。…彼等の中でどういう基準で変わるのかは昔物の怪達によって知つたがそれは生まれ変わっても健在らしい。

「うん。…よろしく」

昌秋も久しぶりの彼等に会えた事はうれしい。ただど疑問に思う事は色々ある。ただの雑鬼である彼等がよくこの時代まで彼等がよく生きていたとか今までどこにいたのかだとか。それに自分の事を黙っていてもらわねければならない。

昌秋は真剣な顔をして足元にいる三匹に聞く。

「聞きたいことがある。…お前等いままでどこにいたんだ？」

あの時代から今の時代まで何百年、何千年とたっている。
その時代の中、よく生きていたな」

妖は元々長寿だ。長寿といったら違和感があるが、長寿だ。

昌秋の真剣な様子につられたように真剣な顔で聞いていた三匹はニ
ツと笑った。

《俺たち妖だからな！これくらいの年月どって事ない！まあ、殆ど
のやつが時代の流れの中でなくなっちゃったが、俺たちは昔お姫
が安倍邸に誰かがきた時に一時的に住んでたあの邸にいたんだ！》

「あの邸に？」

昌秋は驚愕に目を見開いた。

《おうよ！あそこにいたんだ》

妖は弱い。だけど命を脅かすものがないとここまで長生きできるも
のなのか…。

昌秋は感慨深いものを感じた。
だけどそれ以上に嬉しかった。

自分を知っている存在がたとえ妖だとしてもこんなにも嬉しいもの
だ。

長生きする命（後書き）

ありがとうございました。

雑鬼に頼みごと。

《昌秋お前なんでこんなところいるんだ？》

《この辺に住んでるのか？》

《でも、今まで見たことないぞ？》

相次いで聞いてくる三匹の話を苦笑気味に聞いていた昌秋だが、そこでふと一つ鬼はきよるきよると周りを見回して何かを探しているのに気付いた。

《…？なあ昌浩ー》

「どっした？」

《式神はいないのか？》

昌秋は息を詰めた。

それは昌秋が己の中にずっとしまい込んでいる質問だ。

何故いない？常にずっと傍にいたあの白い物の怪の姿も他の神将の姿ももう…今はいない。

もう二度とあの頃のように変わらず傍らで存在を感じることはできない…。

浩秋が近くにいたのならその存在を確認することはできる。

だけどそれはちがう。…心がちがう、と悲鳴を上げる。

彼等の心は彼等にとって今の主である『晴人』や「昌浩」の生まれ

代わりである『浩秋』

に向いている。

自分は、ただ主の「血縁者」ただそれだけの存在だ。

確かに大切に思われているとは思う。だけどそれは血縁者とい存在だからで、「昌浩」という

存在ではない。それは今は浩秋に向いているのだから。

つらい。ならば本当の事を話せばいい。第三者なら簡単に答えを出せかも知れない。

だけど、それすらも出来ない。……浩秋は大切な双子の弟であり、大切な家族だ。

浩秋を悲しませたく、困らせたくない。それに晴人や神将、家族にも困らせて迷惑かける。

それだけはしたくない。そう決めたのは昌秋本人だ。それを覆すつもりはない。

昌秋は家族が大好きだ。そんな家族をそんな思いをさせたくない。

だったらこのまま何も言わず平穩に暮らしたらいい。幸いこの時代は妖は少ない。

力を求められる事も少ない。

もしあつたとしても窮奇のような強い妖がそうそう出てくることは恐らくない。

母体の中で浩秋を昌秋の『昌浩』の靈力で包み込んでたためかある程度の「靈力」は

浩秋の中に備わっている。それでなんとかなるはずだし、神将がいるし晴人もいる

そう簡単にやられはしない。

それに…もし、もしそんな妖が現れたのだとしたら…。彼等に危険が及びそうになる存在だったなら…。

彼等が見つけるよりも先に昌秋が先に見つけて退けるつもりだ。

…この命。消えることになるうとも。彼等に危害を加えることは許さない。

《お…い？…昌秋？》

昌秋ははっとして三匹を見た。彼等は少し恐々と昌秋を見上げていた。

昌秋は深呼吸した。どうやら深く考えこみすぎて知らぬ間に怖い顔をしていたらしい。

《どうした？なんかあったのか？》

「いや、なんでもないよ」

ホッと息をつく彼等に昌秋は彼等を怖がらせてしまったことに反省した。

「彼等はいない。…いや、家にはいるが俺を傍にいることはもうないと言えるかな」

困ったように言う昌秋に顔を合わせる。

《どういふことだ？？》

昌秋はもう一度深呼吸をして彼等と向き合う。

そして、頼みがある。という昌秋に疑問を顔に浮かべる。

「…神将やじい様、家族達…いや、誰にも俺が「昌浩」だということとは黙っついてくれないか。」

《…それはなんでか聞いていいか？》

「…お前達以外、俺が「昌浩」だという事を知らない。そして俺はこのまま言うつもりはない」

三匹はそれに目を剥いた。

《な、なんでだよ！？だって昌秋が「昌浩」なにになんて！？》

「…俺の双子の弟の浩秋が「昌浩」だと皆は思っているんだ。それを俺がそうだと言ったら家族を皆を困らせる。…俺は彼等を困らせたくはないんだよ」

昌秋の言葉に無言になる三匹

《…だって、それじゃあ昌秋は…お前はつらくないのかよっ！！だつてずっと傍にいた奴に勘違いされて傍にいられないなんて…》

昌秋は悲しそうに笑う。

「姿が見えない訳じゃない。会えない訳でも話せないわけでもない。家に帰れば彼等がいる。俺の傍にいらなくてもじい様や浩秋の近くにいるんだ。…だからそれでいい。」

《そんなあ、昌秋…！！》

三匹の声は涙声になっていた。それは悲しい顔をする昌秋の姿を見たから。なにより昔の彼等をずっと知っているから…。

泣きながら言う彼等に昌秋は困ったようにだけど嬉しそうに儂く笑う。

そしてポンポンと三匹の頭を叩いた。

「ありがとう。お前達が俺を知ってくれている。それだけで俺はいい……」

《《《うわ〜ん!!昌秋〜!!》》》

えぐえぐと泣きながら昌秋にすがりついてくる三匹の姿に昌秋は心に暖かくなった。

雑鬼に頼みごと。(後書き)

ありがとうございました!!

帰り道

時間は深夜の3時。

あの後泣き止んだ雑鬼に今後のことを頼むと、彼等はまだ僅かに涙声で誰にもいわないと約束してくれた。それだけでなく、他にも手伝いがあるならいつでも頼ってくれよ！と言ってくれた。

それは昌秋にとつてありがたいことだった。

このまま誰にもバレることなく平穩に過ごしていくつもりだったが、今は気になることがある。

雑鬼達を襲った妖だ。あんな妖この時代で見たのは始めてだった。

あの妖がどこからきたのかどこかにずっと隠れていたのかはわからないが、このままにしておけない。

あの一匹だったらいいが、他にもいるとしたら不味い。

ただでさえこの時代の人は妖など見たことない人ばかりだ。いたとしても一握りぐらいだろう。

そんな妖がこんな街中でしかも子供達が遊ぶ公園に現れたのだもし他にもいたとしたら町中が大混乱に陥る。そうなったらもちろん裏の仕事としている安倍家に話ぐるだろう。

今回のやつはそんなに強い奴じゃなかったから浩秋でも退ける事も出来るだろう。

だけど、もしもつと強いやつが現れたら…？

そう考えるとほっとけない。だから念のために明日から夜警の日数を増やそうと

考えている矢先の時に雑鬼達の言葉だったから正直ありがたかった。雑鬼達には何か異変があったらすぐに知らせるようにと頼んだから何かあればすぐに知らせてくれるだろう。もちろん人には見つからないようにだが。

昌秋も夜警はやっていくが晴人や神将がいる家だ。そう毎日うまくいくとは限らないからそのほうが助かるのが本音だった。

家が近づいてくると昌秋は家の周りの気配を探る。

神将や晴人の気配はない。

それを確認すると昌秋は来たときと同じく門の上の方まで伸びている木の枝にぶらさがりそつと自分の部屋の窓に足を掛けて中に入っていく。

トンツと足に地をつけるとホツとした。

そして窓をしめるとさっさと靴と外套を脱ぎクローゼットの奥に直す、ベットに入る。

机の時計を見るともう時計の針は夜中の3時半を示していた。

今から寝たらまだ寝る時間はあるな。そう思いつつやはり久しぶりの戦闘で疲れがでたのか

いつの間にな眠気が襲ってきて気付けば眠っていた。

帰り道（後書き）

ありがとうございました。
今回はちょっと短めです。

懐かしき光景

翌朝。目覚ましの音楽できつちり目を覚ました昌秋は着替えるとすぐにリビングに下りた。

昔は物の怪が傍にいたし一緒に寝ていることも珍しくなかったから朝になって目が覚めなかったときも物の怪が起こしてくれた。

だけど今の時代そうはいかない。傍に物の怪がないし自分で起きるしかない。

だけど目覚まし時計というのがあるこの時代にはさほど苦労はしなかった。

リビングに入るとそこには晴人と父の昌人、母の秋菜がいた。

おはようと挨拶をする昌秋に三人のあいさつが返る。

その後、食事を昌秋が朝食を済まして学校の準備をしていると昌人が会社にいく時間になっていた。

「じゃあ、俺は行ってきます」

「ええ。いってらっしゃい」

そういつて玄関に向かうためにリビングを出ると母の秋菜がちらりと階段を見て困ったようにいう。

「浩秋はまだ寝ているのかしら？」

同じように二階を見る昌人も仕方がないというようにに言う。

「たく、しかたがないやつだな浩秋は」

「浩秋は昔からああじゃな」

晴人が昌人達のところにいき呆れたように言った。

「昌秋、悪いけど浩秋を起こしてきてくれないかしら？」

困ったようにいう秋菜に昌秋は笑う。

「うん。わかった」

「お願いね」

昌秋は浩秋を起こすために二階に上がっていった。

二階に上がると浩秋の部屋の前で足を止める昌秋は深呼吸をした。
この部屋に入り姿を見るのに覚悟をした。

浩秋の部屋には常にそばにいる物の怪の姿がある。

平安の時代、物の怪の傍にいたのは自分だった。そしてこれから見る姿は

昔の自分の姿だ。昔は自分が朝、出仕するために起きなければなら
ないのに夜警の

疲れで起きれなかったときは物の怪に起こされていた。

今はもうあのときじゃないけれどそれと似たような状態の今それを見
る覚悟をしなければ

ならない。…動揺しないように覚悟を。

「浩秋、入るよ」

ノックをして返事がないのを確認して静かに入る。

そして中に入ってみた光景を静かに見つめる。

懐かしさが込み上げた。昔の自分達を見ていたようにダブって見えた。

「おう。昌秋おはようさん」

物の怪が昌秋に声を掛けてきた事ではつと我に返る昌秋。

内心で息を吐くと部屋の中を見ると浩秋がベットで寝ていて、その横に物の怪が浩秋の頬っぺたを叩いていた。

「おい！浩秋！！起きろ！おい、浩秋！！」

その内、浩秋の瞼がゆっくりと震えた。

「ん〜ん…あ…もっくん、おはよ」

「おはよ。じゃねえよ！昌秋がお前を起こしにきてくれたんだぞ！お前がグースカ寝てるから！」

「ん…昌秋？」

浩秋が戸の方を見ると昌秋がこちらを見て苦笑をしている姿があっ

た。

「あゝ…おはよう」

ふあゝとあくびをしながら起き上がる浩秋に傍らにいる物の怪ははあゝとため息をだした。

「ほら！はやく起きて下に下りるぞ！」

「あゝ…今何時？」

ゆっくりとベットから起き上がると時計を探す浩秋に物の怪はずいっ！と時計を突き出しす。

「7時50分だ！！」

家を出るのは8時ちょうど。これからだと着替えて朝食をゆっくりしている暇はない。
急がないと遅刻確実だ。

それを聞いた浩秋は一瞬で目が覚めた。

「え…え…え…！遅刻するじゃん！！！」

バタバタバタとそれはもうそんな効果音が聞こえてきそうな感じで急いで用意をする浩秋。

「なんでもっと早く起こしてくれないんだよー！！！」

「馬鹿かっ！！俺はずっと起こしてたぞ！？その前に自分で起きよ

うと努力しろ！」

わく！！もうもっくんの馬鹿く！！

叫びながらも急いで着替えて鞆に教科書などをつめる浩秋。

「ったく。…昌秋悪かったな。すぐに行くからお前は先にいってろ」

戸の前に呆然と突っ立っている昌秋に言う物の怪に昌秋はそう返すと部屋を出た。

「あ…うん。じゃあ後でね」

「おう」

「…っ」

パタンと戸を閉じた昌秋はグツとともすればもれそうになる感情をかみ殺した。

ははは…覚悟はしていたつもりだけど、もっくんの姿を見ると…。

「…やっぱり、キツイなあ…」

思わず動揺してしまった昌秋はぎゅっと目を一度強く閉じるとゆっくりと開く。

自分の中の動揺を押し隠して目を開いた昌秋はゆっくりと階下に下りていった。

懐かしき光景（後書き）

ありがとうございました！！
感想くれたら嬉しいです！

宿命の相手

翌日の放課後。

いつものように下校して、彰菜を家まで送り届けると昌秋はちよつと学校に忘れ物をした。

と浩秋を先に帰るように言って一人道を戻った。

その際、物の怪や浩秋にめずらしそうな顔をされた。普段、忘れ物などは殆どしない昌秋のため不思議に思ったらしい。

そんな一人と1匹に笑って誤魔化して、来た道を引き返した。

昌秋が向かった先は隣町の学校の少し離れた所にある一軒家だった。そこはもうかなり前から誰も住んでおらず年月もたっているのか扉は壊れているし、中も蜘蛛の巣が張ってあってあちことがボロボロの家だった。

こういう人間が誰もいない家は昔から雑鬼達が好む家である。

雑鬼達がいつからいるのかわからないが、この家は昔から有名な心霊スポットらしい。

それを聞くだけでも雑鬼が昔からいるのがわかる。

ガタンとその家に入るともう古いため衝立がわるいのが玄関のドアが簡単に開いた。

キーンとゆっくり開いた扉をくぐり、足を進める昌秋に向かういくつもの視線があった。

《ひそひそ…》

《誰だあれ》

《人間だ…ここに人間がくるのはいついらいだろうな》

《どうする？どうする？》

昌秋の耳にいくつもの声が聞こえた。その声はた楽しそうな声だった。もちろん昌秋には全て聞こえているとため内心苦笑を零しつつ足を止めた。

《お、とまったぞ？》

《まさか俺達の声が聞こえているのか？》

《まさか、昔とちがって今は聞こえるやつなんか滅多にないぞ？》

昌秋はフツと笑って声が聞こえている方を見た。

「…悪いけど、全部ちゃんと聞こえてるから」

そこには数匹の雑鬼達が昌秋の方を見ていた。

昌秋が自分達を見ているのに気付いた彼等は驚愕に目を見開いている。

《《お前俺達が見えるのか！？》》

ポトポトポトと屋根から落ちてくる雑鬼達。

「ああ…」

《《ああああ！！昌秋ー！！》》

その時、部屋の奥から猿鬼、一つ鬼、竜鬼が走って来た。

《なんだあ？お前達の知り合いかあ？》

一匹の雑鬼が走ってきた三匹に言う。

《あ！もしかして昨日言ってた昌秋ってあんたのことか？》

《ああ！あの！》

《ほう、あんさんがそうかい》

雑鬼達はジーと好奇心旺盛な目で昌秋を見ている。

昌秋は思った…。雑鬼共よ、一体どんな説明をしたんだ。

「……………とにかく、今日はあまり時間がないんだ。昨日の様子を聞きたいんだけど？」

聞きたいことはあるが今は時間がない。早く聞いて帰らないと怪しまれるかもしれない。
それは避けたい。

《昨日か？…得になんにもなかったぞ？》

《ああ！平和そのものだったー！！》

「…そうか、ならいい」

ホツと息を吐く昌秋だったが一匹の雑鬼が《あ、でも…》と何かをいいかけた。

「なに？なんかあつたのか!？」

《え…あ、いや、その》

その雑鬼の言葉にその雑鬼に向き直り聞く昌秋にいささかビックリしたかのように言葉を濁す雑鬼に昌秋ははつとする。

「あ、悪い…」

《あ、いや別にいいけどよ》

昌秋はハーと息を吐いた。

「それで?」

《俺もはつきり見た訳じゃないんだけどな…なんか嫌な気配がしたんだ…。そんですぐそこから離れたんだけど…その時声が聞こえたんだ》

「声?」

《ああ…ちゃんと聞いたわけじゃないからはずきりはわからないが…なんか「安倍昌浩」って…言ってた。…なあ?それってお前の事じゃないのか?》

「……………それは妖か？」

《ああ。たぶんそうだと思うけど…》

昌秋はジツと考えこんだ。

俺を…「昌浩」を知っている？でも妖で俺を知ってるやつなんて…。

昌浩と言ったって事は前世関係か。

だけど妖で知ってるやつなんてそんなにいない筈だけども…。

「他になんかいつてなかったか？」

《うーん…えっと…せっき…がどうの言ってたような》

ドクンつと心臓が脈打った。

「殺鬼だつて!？」

殺鬼。それは「昌浩」が亡くなるきっかけを作った妖。

平安の時代。

ある貴族が出仕の帰りに何者かに攫われ数日後に遺体となって発見された。

さらに数日後、同じような事件が何件も続けてあったため陰陽師で安倍晴明の後継である昌浩に声がかかった。昌浩が調べて結果。妖で人間を襲い、人の命の源を吸って妖力を増幅している事が判明。

昌浩と神将達が退治しよう乗り出し、部下の妖を神将に頼みながらも昌浩は戦ったが、相手が思ったよりも強く、ギリギリまで妖を追い詰めたが最後のとどめを指す力が昌浩には残っていなかった。

そのため封印をするのがやっとだった。その時の傷が元で昌浩は死んだのだ。

その殺鬼の封印が解けた。
そついう事か…。だが一体誰が？

《…い？…おい！昌秋！》

昌秋ははっとした。

「あ…ごめん。」

《大丈夫か？》

「あ、ああ」

昔の、あの時昌浩が死ぬ原因となった脇腹がドクンドクンとまるで脈打つかのように感じる。もうそこには傷など無いのに…。

昌秋は深く息を吐き深呼吸をする。気のせいだ。もう傷などない。これは魂の記憶が感じている幻だ。

気付くとだいぶ時間がたっていた。

そろそろ帰らないと…。

昌秋は情報をくれた彼等に礼をするとその家を出て帰り道を急ぐ。

「殺鬼」俺が…昌浩が戦うべき相手。昔の昌浩でさえ死に追いやるきっかけを作った妖。

この平和な時代に生きている浩秋には無理。神将がいたとしても下手をしたら死ぬ。

そんな事はさせない！

元々俺があの時倒さずに封印をしたことが原因。いくら体力も霊力も限界に来ていたとはいえ倒すべきだった存在。

あいつは……俺が、倒す！！

夕焼けが紅く空を染めていた。

それは物の怪の瞳と同じ色。とても懐かしく優しい色をしていた。その色を見ながら昌浩は心に決意を新にした。

宿命の相手（後書き）

ありがとうございました。

封印塚

あの日から数日たった。

夜警も神将の目を盗んで部屋に自分に似せた式を残してしている。だが、いつまで持つかわからない。もし晴人に見つかったらアウトだ。

雑鬼にもなにかあればすぐに知らせるように言っている。

あれから数日たった今日まで妖が出ることもなく平和にすごしているが、奴が出てきているのだとしたら安心はできないのだ。

今日は日曜日、学校は休み。昌秋は少し出かけてくると両親に言って昔、奴を封印した場所に行ってみることにした。

そこは昔は大きな河だったが、今はもうその河もなく広い道路となっていた。

そこを昌秋は周りを見回しながら歩く。昌秋はその道路の橋にある信号のすぐ後ろにある大きな木が生え伸びておりその木の葉が僅かに信号の明りを隠すか隠さないかぐらいになっていた。

その木の後ろ側に何かあるのを見た。

その場所に行き木の後ろを覗き込むとそこには元は塚か何かがあったようだが今はもう壊されていた。

その塚らしきものの直ぐ傍に木の看板が落ちていた。それを見るとそこにはかなりが年月がたっているであろう字で《封印塚》と書いてあった。

「…これは…」

昌秋は塚の前にしゃがみ込んでその中を除き込むと木箱があった。その木箱には昌秋は見覚えがあった。これは…昌浩が殺鬼を封印した札を木箱に納めさらに封印札で二重に封印した箱であった。その証拠にその木箱には敗れた札が張り巡らされていた。その木箱の蓋には大きな丸い穴が開いており、そこに手を翳すと僅かに妖気を感じた。

この妖気は…殺鬼の…。
やはり封印は解けていた…。

「だけど…なんで？」

封印を施してからからの年月がたつているとはいえ頑丈に施した封印がそう簡単に解けるとは思えない。…ならば何者が封印を解いたか？奴の仲間か？

色々疑問は残るか奴の封印が解けたのは現実のようだ。
早く、見つけ出して倒さないと…また関係のない人間を犠牲にしてしうまも知れない！！

昌秋はグッと拳を握るとそこから離れて奴を探すべく走り出した。

封印塚（後書き）

ありがとうございました。

浩秋、出勤。

翌日の夕方、夕飯を済まして部屋に戻る途中で浩秋に呼ばれた。

「昌秋！」

「どうかした浩秋？」

自分の部屋の前で浩秋を振り返ると浩秋は少し怒ったような顔をし
ながらこちらに来了。足元にいる物の怪は呆れた顔をしていた。
…どうしたんだろう？

「…ちょっと聞いてよ昌秋！！」

昌秋に怒りをぶつけるように言う浩秋に昌秋は笑う。

「いいよ。部屋で聞くから入って」

そういつて部屋に入れると浩秋はそのままベットに座った。
物の怪はベットの足元で座った。

「どうしたの？」

「聞いてよ！さっき急にじい様に呼ばれたからいったら！なんて言
ったと思う！？」今日からお前ちと夜警行ってこい「だよ！」

「へ…へえ〜」

…じい様。昔とまるっきり同じことしてるんだ…

昔もよく、まるでちょっとそこまで買い物に行つてこい。みたいなノリで妖退治をさせられてたな……。と昌秋はどこか遠い目をしながら聞いてた。

「一体何考えてるのかわからないよ！夜だよ夜！しかも夜中に！」

「お前なあゝ、昔は夜警なんて珍しくもなかっただろっに」

物の怪が思わずといったように口を挟んでくるがそれに浩秋がキツと物の怪を睨む。

「だから、俺にはそんな記憶はないっていつてるじゃないか！！それに今は昔と違って夜に俺みたいな未成年が歩いてるのみつかったら下手したら補導されるじゃないか！」

確かに昔は外灯なんてついてないから今みたいに明るくもないし、歩いていたらって補導されるような心配は殆どなかった。

だが、もしあったとしてもあの晴明がそう簡単にあきらめるなんて事はなかっただろっ。

「そんなの自力でなんとかしろ。晴人なら絶対そうする。それに浩秋忘れてないか？」

晴人がお前に夜警をしろっつていったのは今日の朝方に出た妖を探して退治するためだ。

後継のお前がいなくてどうする？」

「だから俺はっ」

後継なんて知らない。そい言いたかったが物の怪のその真っ直ぐな目にはいえない。

昌秋は妖が出たという新たな情報に目を見開いた。

「っ！…朝方？」

朝方、と言った。昨日夜警からかえってきたのは大体3時半頃。恐らく現れたのはその後なのだろう。

息を呑んだ事はバレなかったようで聞き返した昌秋に浩秋と物の怪が目を向けた。

「そうだよ！妖だよ！？しかも人1人襲われてるんだよ！？幸いその人はなんとか逃げて無事だったらしいけど…。そんな奴に今まで殆ど妖なんて退治した事ない俺に行き成りそんな事言われても出来るはずない！ねえ！昌秋もそう思うよね！？」

物の怪はそう行って昌秋に詰め寄る浩秋がいるベットに乗って浩秋の方を向いた。

「浩秋。いいか。確かに今のお前は妖を退じた事はない。だが、お前は『昌浩』だ。昔は数え切れないほどの人に危害を与える妖をお前は退治してきた。だからお前なら出来るはずだ。現に晴人は最初の内から妖退治をしていた。」

「それはじい様に前世の記憶があったからで、俺にはないの！！そんなの出来るはずがないよ！！」

「だったらさっさと思い出せ！！そしてちゃっっちゃつと妖退治を済まばいい事だ！」

「無理言わないでよ!!」

確かにそれは無理だ。何故なら浩秋は昌秋ではないのだから。

二人は睨み合っているが、忘れていないだろうか。ここは昌秋の部屋である。

この部屋の主である昌秋はその二人を寂しそうな瞳で見ている。

「あー!! わかった分かったよ! 行けばいいんだろ! 行けば! でも妖がいなかったらすぐ帰るからな! もしいたとしても無理だと思ったら俺即逃げるからな!」

しばらく言い合いが続いていたが、浩秋がそういう。

物の怪は呆れたように浩秋を見るが浩秋はそれをもう覆すつもりはないように物の怪の視線を無視して返した。

「……………浩秋。」

収まったのを見計らって昌秋が声をかけると二人ははっとしたように昌秋を見た。

完全にここがどこだか忘れていたようだ。

「あ…ごめん。」

昌秋は苦笑をこぼす。

「いや、それより浩秋、そろそろ行ったほうがいいんじゃないか? あまり遅くなると本当に夜中になるよ?」

「え!？」

浩秋が時計を見ると時刻は10時を回っていた。

「うわっ! 本当だ。じゃあ、昌秋行ってくる!...行くぞもっくん
!..!」

そついうと走っていった。

「もっくん言うな! 晴人の孫!!」

「孫孫孫言うな!」

そついいながら掛けていく姿を昌秋はボーと見ていた。
その瞳に悲しさを宿しながら...

そして奴が現れ、そして浩秋達が夜警に行くことがわかった今、急
がないといけない。と
焦りが出てきた昌秋だった。

妖と鉢合わせ

夜、12時を過ぎた頃、昌秋はいつものように外套を身につけると家を後にする。

今日から浩秋と物の怪が夜警を始めているからいつも以上に気をつけないといつどこで会つかかわかない。

昌秋は気配を断ちながら周りに警戒をしながらゆっくりと足を進めていた。

昨日現れてた妖は奴なのだろうか？襲われた人は無事だったみたいだけ…。

殺鬼に襲われて逃げれるなんて在りえるだろうか？いや、昔も始めの内は無事の人もいたけど回を重ねる事にやつから逃げれる人間はいなくなった。

…もしかして封印が解けたばかりで体力が完全じゃない…？

…どちらにしても昨日の奴が殺鬼と関係あるのならば今日も何かしら起こす可能性がある。

その時背中がゾツと何かが走り抜けた。そして明るく照らしていた外灯がバチバチバチと点滅する。

昌秋ははっした。

「・・・っ!？」

この感じは知っている。これは妖気だ。しかも邪気をはらんでいる。

昌秋はバツッと妖気を感じた方を向いた。そこには闇があった。

昌秋がいる辺りはバチバチと点滅しながらも外灯がついているにも関わらずそこには何もなくてただ闇が存在していた。

「…っ何者だ!？」

息を呑み誰何をする昌秋にその闇に蠢く存在はゆつくりと動いた。動いた事で昌秋側にあった外灯の光が届きはその存在を露にした。そいつは闇のような真っ黒い毛むくじやらな大きな体にその顔はイノシシの顔、口は二本の牙。さらに手は鋭い爪が伸びていた。

《…人間…極上の獲物…》

それは霊力のことを言っているのかそれとも人間そのものを指しているのかはわからないがただ分かることはこれは妖である、

…やはり、いた。こんな奴に浩秋と戦わせるにはいかない!

「もう一度聞く。何者だ?朝方に人を襲ったのはお前か!？」

これは奴…「殺鬼」ではない。だが、この気配は奴と似ている。

《クククク…貴様のような力の強い人間は久しぶりだなあ》

「答える!！」

《ああ…そうさ人間を襲ってやった!だが惜しいことに逃げられちゃった。…だが!

今日はそうはいない!!またとない極上の獲物!貴様は逃がさない俺が食ってやる!ありがたく思え!!》

グワアアアアと襲い掛かってくる妖に昌秋は後ろに飛んで避ける。飛んで避けた昌秋は先ほどまでいた場所を見るとここには鋭い爪を地面が抉り取ってそこはボコツとへこんでいた。

その時風にながれてくる神気にはっとした。

これは紅蓮の…。

この神気は普段は優しく暖かいが今は持ち主の感情に影響されてるかのように鋭く怒りを纏っていた。

「…っ!!!」

まさか、浩秋に何かあったのか!?

「お前のほかにもいるのか!?!」

目の前の妖は地面から手を抜き、ニヤリと笑った。それが答えだ。こいつのほかにもいる。

「くそっ!!」

昌秋は今にも駆けつきたい心境に駆られた。だが目の前にいるこいつをこのまま放置しとくわけにはいかない! ならば、退いた後ですぐ駆けつけるしかない!

《ガアアアアアア》

昌秋は素早く真言を唱える。

「オン、デイバヤキシヤ、バンダバンダ、カカカ、ソワカ　！！」

《ガツ！！》

その真言によって動きを縛られた妖の体は昌秋の顔から数センチという所で固まった。

あと数秒遅かったらその鋭い爪で昌秋は攻撃されていただろう。

昌秋は冷や汗を咲きながら数歩下がる。

「…この術は凶悪を断却し、不詳（祥）を祓（払）除す　…万魔拱服、急々如律令　ー！！！！」

風とは別の波動が湧き上がり、轟音を伴って相手に叩きつけられる。まるで見えない雷光のように、それは相手を切り裂き貫き、放たれる妖気を浄化する。

《グギヤアアアアアアアアアアア》

妖が完全に消滅した事を確認した昌秋はほっと力を抜くがはっとして急いで紅蓮の神気を感じた場所に向かって走り出した。

孫という意味

昌秋が妖と対峙する少し前。

浩秋と物の怪は晴人の命令で夜警に出たが特に変わった様子もなく歩いていた。

「あーよかった。なにもなくて。」

「うれしそうだな？」

物の怪の言葉にギクツと肩を震わせる昌秋に物の怪はため息をつく。

「そ、それはうれしいに決まってるだろ！？何もないうって事は平和の証拠なんだから！」

「まあ、それはそうだが。何もないって訳ではないだろう。現に昨日妖が出てるんだから。そのための夜警だしな」

「それはわかってるけど……」

「なら、安心してないで、ちゃんと警戒しとけよ。晴人の孫！」

浩秋はムツとした。

「だから孫って言うなっていつも言ってるだろうっ!？」

「孫を孫って言うてなにが悪い？」

「そ、それはそうだけど…俺は安倍浩秋って名前があって孫って名前じゃないんだぞ!？」

それに孫って言うなら昌秋だってそうじゃないか!」

物の怪はそれに微妙な顔をする。

「うーん。確かに昌秋も孫には確かなんだが、お前とは少しちがう。」

浩秋はそれに怪訝そうに首をかしげる。

「なにがちがうんだよ？」

「……………はあ。もういい。とにかくちがうんだよ」

物の怪はため息をつく。

そんな事、言わなくても記憶があればわかってる筈だ。昔も昌浩が同じような事を聞いた事がある。

その時はまだ昌浩も押さなかつたしわからなかつたが成長して身体的も精神的にも力も強くなつた昌浩はそれを理解していた筈だ。それにあの事件を切っ掛けに雑鬼達も昌浩を一人前の陰陽師だと認め「昌浩」と呼ぶようになった。それでも物の怪や神将にとつても昌浩は「清明の孫」に変わりはなかつた。

だけど、それもさえ覚えていない浩秋に物の怪は落胆の色を隠せなかつた。

同時に何故思い出さない？早く思い出せ!と浩秋に怒りを感じてし

まう。

そして浩秋には何故そんなに落胆するのかなんてわからない。
わかるはずがないんだ。

「???…なんだよそれ？」

そのまま物の怪は無言で浩秋の足元で黙ったまま歩いて、浩秋も無
言になった物の怪にわけがわからないまま黙ったまま歩いた。

「……………あぁ！！！！もうっ！！！！」

数分になるつか。しばらくずっと黙ったままだ歩くだけだったが、
いいかげんこの空気に耐え切れなくなった浩秋がついに声を上げる。
…一応今は夜中なため近所迷惑になるが浩秋の頭の中にはそんな事
忘れてしまっている。

「なんなんだよ一体急に黙っちゃってさ！？俺なにか言った！？」

急に声を上げた物の怪は少しバツの悪い顔をする。

「…別に」

「全然別にじゃないじゃんか！？急に黙ってさ！？何？言いたいこ
とがあるなら言えよ！？」

物の怪はそんな浩秋の顔を見る。

………わかっているんだ。こんな事浩秋に言っただって詮無きことだとい
う事は…。

「……はあ。悪い。お前は何もなるくない。…ただ。」

浩秋は手を腰に当てて物の怪を見下ろす。

「ただ。なんだよ!？」

「ただ…俺が少し焦ってしまっただけだ。…悪かった」

「焦ったって何を？」

物の怪はそれに無言で返した。

「……」

浩秋はそれにはあとため息をつく。

「もういいよ。」

「…それよりも浩秋」

物の怪は話を変えようという。

「なに?」

「あんまり声を上げると近所迷惑だということを忘れていないか？」

浩秋はは…?というように声を上げるが、「ここがどこかとか現状を
思いだす。」

「あ……」

その時今いる道の端の曲がり角から自転車のライトと人の声が聞こえてきた。

「「ゲツ！」「」

思わず道の端に隠れた浩秋達はその曲がり角から来た人物を見るとそこには巡回と最中であろう警察が自転車をころかしながら歩いてきていた。

「…おかしいな。この辺で子供の声が聞こえた気がしたんだが…」

ビクツとする浩秋はドキドキする心臓を落ち着かせながら端に隠れたまま警察が通り過ぎのを待つ。ちなみに物の怪は道の端にはいるが隠れてはいない。普通の人間には物の怪の姿は見えないからだ。

ドキドキドキ…。

そのまま通りすぎていく警察の姿を確認した浩秋は警察が歩いていった逆の方向に足音を出来るだけ立てないように走っていった。

「はあはあはあ…」

さっきの場所からだいぶ離れた所で足を止めると荒れた息を整えようと深呼吸をする。

「はあー。ビックリしたあ。……もっくん！気付いてたなら言つてよー！」

「だから言っただろう？」

「遅いよ！もっと早く言つてよ！」

物の怪はそれにムツとした。

「浩秋もそれぐらい…浩秋！」

気付け。と言葉を続けようとしたが、流れてきた妖気にはっとして浩秋の首元の襟を加えて後ろに飛ぶ。次いでドカアツつと破壊音した。

「なっ！？」

先ほどまでいた場所をみるとそこには見たこともない妖が土を抉りとっており浩秋達をニヤリと笑いながら見ている。

昌浩を知る妖

物の怪が浩秋を下ろすと浩秋は顔を真つ青ににて顔を引きつらせた。

「がつ、骸骨ー！？」

その妖は骸骨の体を持っていた。その大きさは浩秋の背を軽く超え細い体。だがその骨だらけの手は大きくその手の先は鋭く尖っている。

物の怪は目を剣呑に光らせる。

「…浩秋。油断するなよ」

浩秋はぎよつと物の怪を見るが物の怪は妖を睨みつけていた。

「ちょ、冗談だろ！？こんな相手できるはずないだろう！！」

「そんな事言ってもやつは俺達を逃がしてくれる気はなさそうだぞ」

物の怪の言葉に浩秋が妖を見ると妖はギラギラした目で自分達を見ていた。

それは獲物を狙う目。物の怪のいう通り妖は浩秋達の逃がすつもりは毛頭なかった。

「…う…そだろお」

浩秋は後ずさる。昔からお前は「昌浩」だと言われ続けてきた浩秋だが、その力は母体の中で包まれていた昌秋（昌浩）の霊力の影響で出た力である。生まれてきてから13年なるがそれ以上霊力が上

がることも下がる事も無い。だが逆に昌秋は記憶が戻って力も戻った。今では昌秋の方が力は強くなっている。浩秋とてそれなりの勉強はしてきたが、平成の世ですと平和に過ごしてきたまだ13歳の子供だ。

そんな命の関わる戦いなんてしたことなんてない。こんな恐怖を味わった事なんてない。

それなのにいきなりこんな…。

こんな妖と戦うなんて無理だ!!

「浩秋！」

後ずさる浩秋に物の怪が叱咤するように叫ぶが、浩秋はその声すら耳にはいつていない。

この目の前にいる妖から逃げる事のみ頭を占めて聞こえていないのだ。

物の怪は浩秋の姿に内心舌打ちをする。

物の怪はたとえ始めに嫌がっていても、記憶が残っていなくても浩秋は目の前に敵の妖が出れば躊躇わず出る。そう思っていた。

だけど、それは計算違いだったようだ。ここまで浩秋が動揺して恐怖に支配されるとは考えてもいなかった。

「ちっ！浩秋下がれ!!」

物の怪は浩秋の前に躍り出るとその身を深紅に染め上げる。カツと紅い光とともにそこに表れたのは物の怪の真の姿である十二神将一人凶将騰陀…紅蓮だった。

「ぐ、紅蓮」

目の前に現れた紅蓮に浩秋ははっと目を見開いて紅蓮を見つめる。紅蓮は前を見据えたまま視線をそらさない。

目の前の妖はニヤリと笑った。

「…昨日、人間を襲ったのはお前か？」

《クケケケケ…ソウダダガオレダケジャナイゼ!》

「なに!?!もう一匹いるのか!?!」

《ケケケ!サアドウカナア!》

「答える!?!」

紅蓮が叫ぶが妖は笑うだけで答えはない。焦れた紅蓮は手に炎を纏わせた。

「答えぬなら、無理やりにも答えてもらうまで!」

そして目に纏わした炎蛇を妖に放つ。

ゴオオオオオオオ

妖に向かって紅蓮の炎蛇は襲い掛かる。

ギシヤアアアアアア

炎蛇が妖に襲い掛かるがその大きな体で飛び上がると避けた。

「ちっ！」

デカイくせにすばやい…。

紅蓮はつぶやきちらりと後ろの浩秋を見るが浩秋は恐怖でがちがちと振るえさせながら固まったままだった。

妖の恐怖もあるがやつ妖気に当てられてしまったようだ。

早く浩秋を安全なところに連れて行かないと体が持たない…。

紅蓮は焦っていた。

ドオオオンという破壊音と共に紅蓮がはつとして見ると、妖が地面に足をつけていたがああ巨大の体のせいかさこ足元はそいつを中心にしてボコツつとへこんでいた。

《ケケケケケ…ソイツツカイモンニナンネエミタイダナ…チカラモソレホドニモナイミタイダガオレガクツテヤロウカ?》

「ふざけるな！こいつは陰陽師だ！貴様など簡単に捻りつぶしてくれる…！」

《ケケケデキルモンナラナアアアアア！！》

妖はそう言うのと二人に襲い掛かってきた。紅蓮は炎を召還すると炎を放つ！

ギシヤアアアアア！！

妖はその骨の喉から叫びを上げる。とそれが超音波となつて炎をか
し消した。

「なにっ!？」

《ケケケ……。……キサマジユウニシンシヨウトカイウヤツのナカマ
ダロウ?…アベノマサヒロをシッテイルカ?》

紅蓮は目を見開いたそして剣呑に目を光らせる。

「貴様、何者だ!？なぜ昌浩を知っている!？」

妖はクククと喉で笑うはニヤリと笑う。

《ホオ、ヤハリキサマガシンシヨウカア…ケケケジャアソノウシロ
ノニンゲンハアベノマサヒロのエンジャカア?》

紅蓮は妖の視線から浩秋を守るように妖の視線を遮る。

「貴様っ!! 答える! なぜ昌浩を知っている!？」

だが妖は怪しく笑うだけで答えは返らない。

《ナラバシネエエエエ!》

二人に再び声の超音波を放つ妖に避けようを紅蓮が浩秋を抱えて避
けようとしたその時!!

「オンバサラクウダ、ウジホクウダウンハッタ！」

そのどこからか聞こえて来た声と共に放たれた術が今にも紅蓮達に襲い掛かりそうだった、妖の攻撃とぶつかり大きな破壊音と共に爆発した。

謎の人物

「何っ!?!」

妖気と靈気のぶつかりにより大きな爆発がおきその爆風が起きる。紅蓮は浩秋を胸に抱えて後ろを向いて爆風から守る。

妖は突然の爆風の勢いで飛ばされはしなかったが後ろに下がっていった。

「クッ!?!」

しばらくして爆風が収まり、その場にいた全員が顔を上げると先ほどの術が放たれた場所に視線をやる

とそこには黒い外套を頭からスッポリと被る一人の人間がいた。顔はフードでしっかり隠されているためその顔はわからないが、身長はちょうど浩秋と同じくらいだった。そう、それは外套でわからないように体を覆った昌秋の姿だった。

《ナニモノダ!?!》

妖が浩秋に誰何を掛けるが昌秋は無言で返す。

昌秋はちらりと紅蓮達を見ると紅蓮はこちらを警戒したように見、そして浩秋も体を震わせながらも呆然とこちらを見ている姿を認めた。

昌秋はやはりと思った。

今まで平和に過ごしていて妖気さえ殆ど感じたことない浩秋がこんな禍々しい妖気を放つ妖と会ったら…と心配していた。

その予想が当たっていたようだ。
早く浩秋を安全な場所に移動させないと浩秋の体が持たない！

《コタエロ！ニンゲンナニモノダ！？》

そういつつ昌秋を警戒する妖に昌秋はスツと印を組み外套でくぐもった声で言霊を発動する。

「縛、縛、不動縛！！」

《ぐっ！！》

「っ！待て！」

それにはっとした紅蓮は思わず叫んだ。

昌秋はそれにピクリと肩を震わせると印を組んだまま紅蓮を見る。

「そいつには聞きたい事がある！」

紅蓮は妖の動きを止めたまま止まった謎の人物を確認すると妖に向き直る。

「貴様、何故昌浩を知っている？答える！！」

昌秋はそれに目を僅かに見開くと妖を見据える。

《昌浩》を知っている？

…まさかこいつ殺鬼の仲間か？

《クツ…フ…クツクツクツ…》

昌秋の術から逃れようと動いていた妖だが、その質問に紅蓮を見ると突然笑いだした。

「答える！！」

《ククク…アベノマサヒロ…ワレラノアルジガサガシテイル…ムカシヤツハワガアルジヨフウインシタ、ダガアルジハフツカツシタ！アルジノイカリハオサマラヌ！アベノマサヒロノタマシイハコノヨニアル、カナラズヤミツケダシアルジニケンジョウスル！ソシテアルジはソノタマシイヲソノミヲクラウノダ！！》

「な…なんだと…」

紅蓮は目を見開いたそして剣呑に目を光らせると妖を鋭く睨み付ける。

「そんな事させるのもか！！」

浩秋を背にかばいながら紅蓮の周りに怒りの紅い神気が立ち上り炎が召還されその炎が6つの炎蛇となり妖に攻撃をしかける。

ゴオオオオオオオオオと昌秋の術により拘束されている妖は動く事ができずにまともに炎蛇を食らった。

《グギヤアアアアアア！！！！》

その様子を見ながら昌秋は目を細めた。

やはり…そういう事か。だとしたら奴は俺を狙ってくる。さっきの妖の言い方だとまだ《俺》がそうだとは気づかれない。だが、

それも時間の問題か。

「…おい！貴様何者だ！？」

紅蓮の声にはつとなる昌秋はそのまま翻した。

「待て！！」

紅蓮は逃がすまいと昌秋を追いすがすが昌秋はそのまま歩き出す。

「おい！」

「ぐ…れん」

そのまま追いかけてようとする紅蓮だが、後ろから聞こえてきた弱々しい声にはつとなつて後ろを向くと浩秋は体をまだわずかに震わせながら紅蓮を見上げていた。

「っ！」

紅蓮はこんなに体を震わしている浩秋を置いておくことも出来なかった、

早く浩秋を移動させなければ…。

内心舌打ちをしてもう一度振り返るとそこにはもう誰の姿もなかった…。

晴人と紅蓮

浩秋を家に連れ帰り部屋に休ませた後、紅蓮はすぐに晴人に向かった。

「晴人っ!!」

紅蓮が勢いよく晴人の部屋に入ると晴人は机に羅針盤を広げたまま難しい顔をしていた。

「…紅蓮」

紅蓮が入ってきたのを見ると晴人は一度顔を上げて紅蓮を見た。

「・・・見ていたのだろう。奴は何ものだ!? それにあの妖が言っていたことは・・・」

「あの者が何者かは占で視てみたが詳しい事はわからぬ。ただ我々の敵ではないと出た」

「敵ではない?・・・確かに結果的に俺達は奴に助けられた。だがそれだけで味方だとは思えない」

晴人はうなずいた。

「紅蓮の言う通りはつきり味方だとは今のところわからない。・・・詳しいことがわからぬが今の状況ではどうともいえん・・・。だが敵ではないのなら今の所そう警戒せんでもいいじゃろう。」

それよりも今はあの妖が言っていた事が気になるの。…あの妖は「

昌浩「に封印された主が「昌浩」を探している。と言った。お前達はそいつを知っているか？」

晴人は知らない。恐らくその時はもういなかったのだろう。

紅蓮やその話を黙って聞いていた勾陳、六合は息を呑んだ。

それは彼らにとってつらい記憶であった。

「・・・知っている。・・・恐らく妖が言っていた昌浩に封印されたという妖は「殺鬼」。・・・昌浩が最後に戦った妖であり・・・そして昌浩が死ぬ原因を作った妖だ」

勾陳がつぶやくように言った。

それを聞いた晴人は息を呑んだ。そしてそうか・・・と答えたのだった。

「・・・わしはもうその時、逝っていたからな。詳しいことを聞かせてくれんか？」

そうして、ゆっくりと聞いたのだった。

話を聞き終わった晴人は黙ったまま考え込んだ。

「……なるほど……ふむ。どういふ訳か封印が解けた妖が封印を施した昌浩を恨みその積年の恨みを今世に転生した昌浩……浩秋を狙っている。そういう事か？」

「恐らくは。だが、奴等はまだ浩秋に気付いていないようだ」

晴人は頷いた。

「だが、いつ気付くかわからん。紅蓮、今以上に浩秋の周りに警戒を頼むぞ。勾陳、六合お前達も頼む。他の者にも伝えてくれ。」

紅蓮、六合、勾陳が頷いた。

警戒態勢な神将達

翌朝、昌秋がいつもの通りに目が覚めるといつもよりも神将の気配を多く感じた。

おそらく昨日の事件で妖が”昌浩”を狙っている事を紅蓮たちから聞いた晴人が神将達を警戒させているのだろう。

昌秋の予想では家の中だけでなく、外にも神将達を出して妖の搜索をしているのだろう。

でなければこの気配の多さに説明がつかない。

昌秋も昨日の事で予想していた事だ。

さらに言えば浩秋の周りにも紅蓮だけでなく他の神将達も警戒してつくだろう。

これで浩秋の危険度は完全ではないがだいぶ減った。

だが、逆に昌秋にとっては動きにくくなった事になる。

浩秋のそばにいますという事は登下校を共にしている昌秋とも一緒だという事だ。

昔から共に登下校をしていた昌秋が今は別に帰る事が多くなっている。

それは妖を探しているためではあるがそれを気づかれる訳にはいかない。

別々に帰る事は出来るかもしれないが、それを何度も繰り返していれば彼らの中の誰かに不審に思われる確立が増えたということになる。

正直…やりにくくなった。

下手に不審されて晴人に伝わったりしたらそれこそバレル確立が高くなる…。

昌秋はそれをずっと考えていた。

「ふう…」

とりあえず、ずっとこうしている訳にはいかないので制服に着替えてリビングに下りると

昌秋の予想通り神将の姿がちらちらと見られた。

「おはよう昌秋」

リビングに下りてきた昌秋に気づいてにっこりと笑う秋菜や昌人に昌秋はにっこりと笑う。

「おはよう。母さん。父さん。じい様。……今日はやけに神将の姿が多いですね?」

不自然にならないようにさも今気づいたといわんばかりに晴人に声をかけた。

「まあ、う……。なあに、気にすることでもなからう。こんな風もたまにはよからう?」

まあ、当たり前だが言葉を濁している晴人に内心苦笑をこぼす。

(まあ、言えないよな)

「…そうですね。たまにはいいかもしれないですね」

昌秋もそれ以上詳しく聞こうとはせずになづいた。

聞かなくても知っているから。

そして学校の話とかさわりのない話をしながら食事していると秋菜がふと時計を見るともう浩秋が起き

なければ遅刻する時間になっており…。

「あら?もうこんな時間。昌秋悪いけどまた浩秋起こしてきてもらえるかしら?」

そういう秋菜になづくといつもの日課である浩秋を起こしにあがついていく昌秋であった。

貴船の神（前書き）

やっと出せた！長かった！！

ずっと出したかったが中々出せなくてどうしようか考えていました。

よかったやっと出せて（笑

貴船の神

休日の朝、昌秋はある場所に向かった。

その場所とは……………貴船であつた。

貴船山に登っていると感じる相変わらずの神聖な空気。

ここはいつの時代も変わらず存在していた。

山を登りきり本宮跡地に足を踏み入れ奥に据えられた船形岩の前で立ち止まるとこの生で聞く初めてのそして懐かしい腹の底から響くような声が響いた。

「これはまた懐かしい気配がするな……」

その声と同時に凄まじく苛烈な神気が出現し、瞬く間に収縮した。

人身をとつて姿を現した高淤の神は久しぶりな気配を発してその場に立っている昌秋に視線をやった。

「…お久しぶりです。高淤の神」

礼の形をとる昌秋に高淤の神は面白そうに見やる。

「転生していたか。安部昌浩」

「はい。挨拶が送れて申し訳ありません」

そういつてくる途中で買ってきた京都で美味しいと有名な名物品を
高淤の神にうやうやしく差し出す。

「これは？」

昌秋はそれをどこか困った様子で答える。

「今の時代、私の年代ではお酒は変えないのでこんなものしか出来
ませんが…」

高淤の神はそれにどこか満足そうな瞳を向ける。

「まあ、よい。」

昌秋は内心ホッと安堵する。

「ありがとうございます」

「それで安部昌浩…。いや今はちがう名か。なんといっ？」

「今世の名は安部…昌秋といいます」

高淤の神はその答えに面白そうな顔をする。

「ほお。今世でも安部に生まれたか。」

「はい。」

高淤の神はそういって昌秋を鋭く見た。

昌秋はその鋭く研ぎ澄まされた神の瞳に緊張する。

「…で、お前は何しに私に会いにきた？ただの挨拶というわけではなかるう？」

「……はい。もちろん挨拶もあります。だけど、もう一つ……。……この京に奴が…数百年前にこの京に現れた妖「殺鬼」が再びこの地に現れました。何者かがその封印を解いたようです」

「「殺鬼」…あの時代でお前が封印したあの妖か…」

「はい。私はまだ殺鬼の姿を見ていません。ですが、やつに付いていると思われる妖と戦いました。」

奴はいいました。「主が昌浩を探している…封印された主は復活し主の怒りは収まらぬ、昌浩の魂を見つけ出しその身と魂を食らう」と。やつはきつと現れる。俺の目の前にそして…彼らの目の前に」

「それは十二神将のことか」

昌秋は少し悲しげな顔をして高淤の言葉につなづく。

「今世で彼らは私が「昌浩」だとは知らない。それは自分で巻いた種であり仕方がない事です。そして、今世の私は双子の弟、「浩秋」がいる。彼らは昌浩は浩秋だと思っているのです。」

浩秋は母の母体の中で私の霊力を浴びて霊力を強くもってしまった。そして私は霊力を限りなく小さくしていたため気づかれる事なく、浩秋が昌浩だと勘違いされてしまった…。

だからこそ長い期間昌浩の力を浴びた浩秋は妖に狙われやすくなっってしまった…。

……私は、やつを殺鬼を、彼らが気づかれる前になんとかしたいの

です。

……出来るだけ早急になんとかするようにはします。

……高淤の神。この地は再びやつによって荒れるかも知れません。そのご報告を今回しにきに参りました。」

その言葉をジッと黙って昌秋を見たまま高淤の神はスッと目を眇める。

「「清明」はどうした、やつもいるだろう?」

「……確かにじい様もいます。だけどじい様も知らない。言つつもりもあります。これまでも、そしてこれからも」

「……それでお前はいいのだな」

「……はい」

高淤の神はそれに瞳を閉じる。

「そうか。ならば私は何もいうまい。」

「ありがとうございます」

昌秋はゆっくりと礼をした。

「……………安部昌明。」

呼ばれて昌秋は顔を上げて高淤の神を見る。

「お前の覚悟はわかった。：やはり私はお前が気に入ってるようだ。今世でも高淤と呼ぶことを許そう。……手を貸してほしい時は呼べ。その声が届いたなら力を貸してやる」

神の言葉は言霊。真実しか語らない。

昌秋は驚いて目を見開いた。

まさか再び、そう言ってもらえるとは予想してなかったのだ。

「ありがとうございます。」

再び頭を下げる昌秋を高淤の神は面白そうに見つめたのだ。

貴船の神（後書き）

高淤の神の口調が難しい！なんかキャラが壊れてる気がするわ……。
（汗）

蠢く影

暗い暗い闇の中、蠢くものがいた。

ソレはピクリと体を揺らすとその伏せていた巨体をゆっくりと起す。

そこにバサバサバサつと音を立てて現れた黒い鴉の姿。

黒い体に鳥の羽を持つ鴉のその心臓部分には横一筋の傷のようなのがあった。

鴉がその地に足を下ろすと起き上がって自分をジッと見ている存在に頭を下げた。

《ー聞こう・・・》

鴉は主・殺鬼の聲に垂れた頭を上げると主に目をやる。そしてその身の心臓部分がゆっくりと開きだした・・・。

開ききるとそれは存在した。その鴉の心臓部分にあったのは傷なのではなくもう一つの目だった。

鴉はその目をキラリと光らせた。

その巨体から発せられた声は重くそして禍々しくそして瘴気を浴びている。

普通の人間が聞いたらその発せられる声という瘴気に当てられ生きていることすらできぬだろう。

《は。主の仰る通り彼の憎き安部昌浩はこの世で転生を果たしてお

りました。だがしかし奴の気配を持つもの2人あり。

一人は霊力はありませんでも我々の姿を見ただけで竦みあがるほどの愚者。しかし傍に十二神将がおりましてございます。

そしてもう一人は傍に神将の姿はありませんでした。ですがもう一人と桁違いの霊力を持っている様子。

この者によつて差し向けた妖は滅せられてございます》

それを聞いた殺鬼の回りにいた数多の妖がざわざわと騒ぎ始める。

《・・・奴の転生者は一人のみ。・・・奴はこの世を守る陰陽師・・・人を襲えばやつは姿を現す！！その時こそ我が手によつて葬つてくれようぞ！！》

そついつて殺鬼はニヤリと笑う。

《・・・ならば、その役目我らにお任せを・・・》

そついつて周りの妖の中から一匹の妖が姿を現す。その後ろにも同じような妖がいた。

殺鬼はその姿を目に納めると目を細める。

《影鬼一族か・・・》

影鬼一族。そう呼ばれた妖は殺鬼に頭を下げる。

《はっ！必ずは主の期待に答えてみせましょう・・・》

殺鬼はそれを聞くと満足気に答える。

《ならば、行け！我が念願を叶えるために！》

《はっ！！》

そう影鬼一族はその場から一瞬で去っていった。

《ククククククク・待っている安倍昌浩！その身！その魂！我が盾としてくれようぞ！！》

笑う殺鬼はそういつて笑うのだった。

盡く影（後書き）

今回は敵さんサイドです。

そろそろ本格的に戦闘になる・・・かな？

ニユース

夜、自宅で夕飯を済ました昌秋はリビングのソファに凭れてテレビを見ていた。

この部屋には昌人と秋菜と浩秋と物の怪がいる。

ちなみに晴人は既に部屋に戻ってここにはいない。

今はちょうどニユースの時間らしく画面の向こうでは最近起きている行方不明事件の現場で

アナウンサーが状況の説明をしていた。

《・・警視庁によりますと行方不明者には共通点もなく目撃証言も今だないとのことで捜査は難航している模様です》

「ん?・・この事件の場所って隣町じゃないか?」

「本当だわ。怖いわね・・犯人もまだ見つかってないんでしょ?早く見つかるといいけど・・。昌秋たちも気をつけてね」

ニユースを共に見ていた昌人は見覚えのある場所に声を上げると秋菜が心配そうに言った。

「うん(ああ)」「」

「母さんこそ気をつけてよ。買い物とかで外出るんだから」

「ええ。気をつけるわ」

「あ!なんならさ、じい様に頼んで神将の誰かについてきてもらおう

つてのはどうっ？」

浩秋はいいこと思いついたとばかりに顔を輝かせるが昌人と秋菜は顔を見合わせる。

「浩秋、いくらなんでも神将を買い物に付き添ってもらうのはどうかと思うよ」

昌人は浩秋に困ったように言うが浩秋はどうして？と返す。

「だって、神将がいたら絶対安全だよ？それに神将には人型をとってもらったら

怪しい人物も近寄らないだろうし、もし来ても神将ならきつと拳ひとつで簡単に捕まえられるよ？一石二鳥だと思うけど」

もっくはそんな浩秋見て呆れたようにため息をつく。

「あのな・・浩秋。確かに神将がいたら安全は保障されるだろう・・。けどな神将には理がある」

「理？」

そう、神将の理とは即ち

「人を傷つけてはならない」

物の怪はソレを浩秋に教えるために言ったその言葉に重なる声がある。つてはつとしてその発信源を見る。

それは昌秋だった。

昌秋はテレビから視線を外して物の怪を真面目な顔で見ていた。

「・・・昌秋・・・知っていたのか？」

物の怪は昌秋を少し目を見開いてみていたがそんな物の怪に昌秋はにっこりつと笑った。

「・・・って前じい様が言ってたよ」

「あ・・・そう・・・か」

物の怪は昌秋が笑ったことで何故かほつとして少しきこちなくうなずいた。

「へえーそんな神将にことわり？があっただ」

「あ・・・ああ・・・」

浩秋はそうなんだ。つと頷き物の怪はそれに我に返ったかのように浩秋を見た。

「・・・だ、だから護衛として守ることはできても拳ひとつで捕まえるのはどうかと・・・」

「じゃあ、護衛はいいんだよね？だったらやっぱりじい様に頼もつとどー」

昌秋はそんな会話を聞きながらそういえば、昔彰子が市に行くのに付き添っていてもらったこともあったな。と考えながらソファから立ち上がる。

そろそろ部屋に戻って用意もしなくてはいけない。
もう遅いしあがったらもう今日は降りてこないだろう。

「あら。昌秋部屋に戻るの？」

昌秋が立ち上がって部屋を出ようとしているのに気付いた秋葉が昌秋に声を掛ける。

「うん。部屋でやることあるし・・・」

「そう。わかったわ。それじゃおやすみなさい」

「うん。おやすみなさい」

そういつて部屋に戻っていく昌秋の耳に部屋の中で浩秋と物の怪の話し声を背に部屋に戻っていった。

だが、昌秋は気付かなかった。

少し前を通りかかった勾陳がさきほどの会話を聞いてその慧眼で去っていく昌秋の後姿を見ていたなんて事は気付かなかった・・・。

ニュース(後書き)

ちよい難産？

どこでこの事件を知らせてよつか悩みました(^^…)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191s/>

『真実の声を聞き届け！』

2011年12月17日23時54分発行